

Preview

兵庫県政150周年記念先行事業 開館5周年記念展

横尾忠則 HANGA JUNGLE

2017年9月9日(土)~12月24日(日)

休館日：月曜日〔ただし、9月18日(月・祝)、10月9日(月・祝)は開館、9月19日(火)、10月10日(火)は休館
観覧料：一般700(550)円、大学生550(400)円、70歳以上350(250)円、高校生以下無料

※()内は20名以上の団体および前売料金

※障がいのある方(70歳以上除く)は各観覧料金の半額、その介護の方(1名)は無料

Topics でもご紹介しましたが、4~6月に町田市立国際版画美術館で開催され、大好評を博した「横尾忠則 HANGA JUNGLE」展が、この9月、いよいよ神戸にやってきます！ 横尾さんがこれまでに制作したほぼ全ての版画作品、200点以上がところせましと展示され、圧倒的なパワーを誇っていたのが記憶に新しい

ところですよ。

残念ながら当館は町田会場よりもかなり狭いので、涙をのんでいくつかの作品をカット…いやいや、そんなことを横尾さんが許すはずがありません。普通ならどう考えても無理な物量ですが、「まあええか、ジャングルやし」ということ(?)、ほぼ全ての作品を強引に展示する予定です。「JUNGLE」度がさらにパワー・アップした、まさに「版画」の枠を超越した前代未聞の「HANGA」展を、ぜひお見逃しなく！

山本淳夫 | 本館学芸課長



横尾さんデザインによる神戸展のためのポスター。本展のための新作版画(ミステリアスな女性像)と、ターザンのイメージが二重写しになっています

兵庫県立美術館 | 展覧会スケジュール

特別展 「柿い絵」展

7月22日(土)~9月18日(月・祝)

大エルミタージュ美術館展

オールドマスター 西洋絵画の巨匠たち

10月3日(火)~2018年1月14日(日)

県美プレミアム

小企画 | 美術の中のかたち一手で見る造形 青木千絵展 漆黒の身体

特集 | みなと物語 新収蔵品を交えて

7月8日(土)~10月15日(日)

※兵庫県立美術館の特別展又はコレクション展の有料チケット半券ご提示で、当館の企画展を団体割引料金でご覧いただけます(詳細はHPなどでご確認ください)

編集後記

横尾さんの目で世界をめぐるワールドツアーはいかがでしたでしょうか。

いよいよ9月からは「最初で最後の大がかりな版画展」(横尾さん)が始まります。次号の特集もHANGA尽くし!?

どうぞお楽しみに。(多胡)

Information 関連イベント

加橋かつみライブ

出演：加橋かつみ、珠希真利

日時：10月1日(日)14:00-

会場：当館オープンスタジオ 参加費：無料、ただし要観覧券チケット

1960年代のグループ・サウンズ・ブームを牽引した

「ザ・タイガース」の元メンバー、加橋かつみによるプレミアム・ライブ

大野慶人パフォーマンス&レクチャー

出演：大野慶人

企画協力：NPO法人ダンスアーカイヴ構想

協力：アンサンブル・ゾネ

日時：11月19日(日)14:00-

会場：当館オープンスタジオ 参加費：無料、ただし要観覧券チケット

「舞踏」のバイオニアのひとりとして、父大野一雄や土方巽とともに

日本独自の身体表現の可能性を切り開いた大野慶人。

伝説の舞踏家による必見のパフォーマンス&レクチャー

ワークショップ「HANGAでJUNGLE探検」

講師：当館スタッフ

日時：10月28日(土)13:30-16:00

会場：当館オープンスタジオ

対象：小学生~高校生

定員：10名 参加費：無料(要申込)

横尾さんの作品の一部をじっくり模写して版画作品をつくろう!

キュレーターズ・トーク

講師：当館学芸員

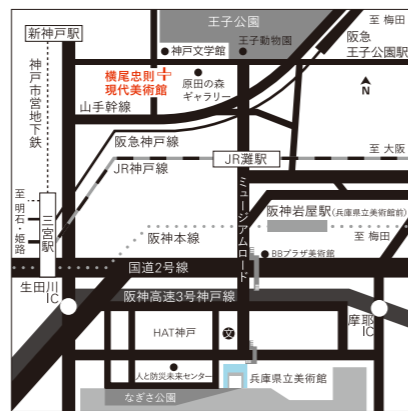
日時：10月7日(土)14:00-14:45、

11月10日(金)、11月17日(金)いずれも18:30-19:15

会場：当館オープンスタジオ 参加費：無料、ただし要観覧券チケット

担当学芸員が展覧会の見どころを分かりやすく解説します

※各イベントの詳細は当館HPなどでご確認ください



Y+T MOCA

〒657-0837 兵庫県神戸市灘区原田通3-8-30
Tel: 078-855-5607(総合案内) Fax: 078-806-3888
www.ytmoca.jp

横尾忠則現代美術館ニュース Vol.16

2017年9月7日発行

編集・発行：横尾忠則現代美術館

印刷：岡村印刷工業株式会社

the Y+T Times

横尾忠則現代美術館ニュース

Yokoo Tadanori Museum of Contemporary Art NEWS LETTER



Special Report ヨコオ・ワールド・ツアー

Event Report

- 01 イブニング・ギャラリートour
- 02 水道筋温泉郷ツアー
- 03 Ayuo スペシャルライブ&トーク

Topics

東京と青森での横尾さんの展覧会をレポート!

Column

アトリエの資料

Editors' Choice

MUSEUM SHOP・アーカイブルーム

Preview

横尾忠則 HANGA JUNGLE

Information

次回展関連イベント

兵庫県立美術館 展覧会スケジュール

16

2017.9.7



1967年から1970年代に通ったニューヨークでは、名だたるアーティストとの出会いも。横尾さんのコレクションも特別出品。

YOKOO TADANORI WORLD TOUR

Special Report

ヨコオ・ワールド・ツアー

2017.4.15-8.20

YOKOO TADANORI WORLD TOUR



横尾さんの旅行かばん

見聞きしたあらゆる事象を独自に編集して作品化する横尾さんにとって、海外旅行は新たな素材の宝庫でした。本展「ヨコオ・ワールド・ツアー」では、横尾さんの人生に交差し制作活動に影響を与えた海外での体験と、横尾作品が世界に拡がっていく軌跡を、作品と豊富な資料で紹介いたします。

横尾さんの初海外旅行は1964年、東京オリンピックの選手を乗せた飛行機の片道の空席を利用した、ヨーロッパへの団体旅行でした。海外旅行がまだ一般的ではないこの時代、3週間で6ヶ国を巡るツアーは一世一代のイベントです。横尾さんはスケッチブックとカメラで各地での印象を丹念に記録しました。残念ながら、最後に訪れたロンドンで、タクシーにスケッチブックを置き忘れてしまったそうですが、当時のスライドフ

ィルムが本展の調査中に見つかりました。スーツ姿できめた若き日の横尾さんと、その目が捉えたヨーロッパの風景、500枚もの写真からワールド・ツアーが始まります。

2階の大展示室入口には横尾さんのパスポートとスーツケース、世界地図にスナップ写真。旅行気分が盛り上がったところで場面は1960～70年代のニューヨークへ。横尾作品とともに並ぶのは、当時のニューヨークのアートシーンを代表する作家、ジャスパー・ジョーンズ、ロバート・ラウシェンバーグ、アンディ・ウォーホル、トム・ウェッセルマンの版画やポスター。彼らと横尾さんとの交流を示す貴重な作品は、横尾さん自身のコレクションです。また、本展で注目した1967年は、横尾さんが初めてニューヨークを訪れた年であり、ニューヨーク近代美術館が横尾さんの作品をコレクションした年。横尾さんは文字どおり世界に向けて第一歩を踏み出したのです。そして、



エジプトのピラミッドで日記にスケッチする横尾さんと当日の日記。作品は《死者の書》2001年 | 当館蔵

初めてのニューヨークでサイケデリック・カルチャーの熱気に魅了された横尾さんは、ディスコ「エレクトリック・サーカス」とクリシュナ寺院に日参し、4ヶ月を過ごしました。横尾さんが夢中になったロックやインド音楽のレコードも今回あわせて展示し、当時の空気を伝えています。その後、ニューヨークは再び横尾さんの人生に大きな変化をもたらします。1980年、ニューヨーク近代美術館でのピカソ展が横尾さんの画家転向のきっかけとなるのです。「いわゆる画家宣言」後の1作目という絵画も展示しています。

ニューヨークに続くのは、ビートルズに導かれて訪れたインド。横尾さんのアイドルだったというクリシュナ神などインドの神々が画面を彩ります。さらには楽園のイメージを求めたハワイやタヒチ、ジャングルに憧れた少年時代を想起するアマゾン、念願であったエジプトのピラミッドへの旅

など、横尾さんの思いと旅の記憶が詰め込まれた作品が、記念写真や日記、記録映像とともに並びます。2000年に夫婦で訪れたヴェネスを描いた作品には、新婚旅行の思い出とともに1993年のヴェネツィア・ビエンナーレ出品のエピソードが盛り込まれ、ヴェネスを巡る記憶がカラージュされています。そしてこれより、展示の軸は横尾さん自身の旅

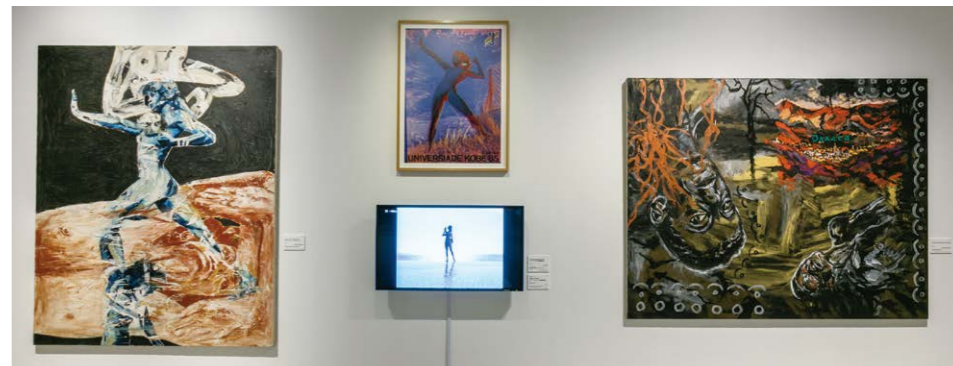


ヴェネスを舞台とした作品《De Chirico misses Böcklin and Nietzsche》2014年 | 国立国際美術館蔵

から横尾作品のワールド・ツアーへと移ります。1970年代、グラフィック・デザイナーとしての国際的な評価を確立するきっかけとなった個展のポスターや、初めて挑んだ版画で「第6回パリ青年ビエンナーレ」版画部門の大賞を受賞した《責場》、画家転向後に招かれた国際展や個展の出品作など、ヨコオ・ワールドが世界に拡がっていく様子を作品で辿っていきます。3階展示室では、音楽、バレエ、パフォーマンスなど、ジャンル横断的な活動を紹介しています。美術という枠組みを超えて横尾作品が認知されることとなったサンタナやアース・ウィンド&ファイアという枠組みを超えて横尾作品が認知されることとなったサンタナやアース・ウィンド&ファイアのレコードジャケットをはじめ、レコードやポスター、その原画、関連作品がずらり。それらは、時代の空気とともに横尾さんの関心や活動の変遷をも映しています。1970年代には宇宙やユートピアを描いた壮大なイメージが、1980年

代以降には絵筆を通したエネルギーが音楽の世界観と共鳴しています。音楽以外では、モーリス・ベジャールのバレエの舞台美術と、ボディビルダー/パフォーマーのリサ・ライオンとのコラボレーションを取り上げました。異なるジャンルとの関わりが制作意欲を刺激し、横尾さんの世界をより豊かなものにしていきます。横尾さんの足跡と作品の変遷を「外国への旅」というテーマで切り取った本展ですが、その活動は想像以上に広範囲かつ濃密で、作品資料や情報の取捨選択にかなり悩みました。そして、どんな断片にも膨大な情報が織り込まれ、「ヨコオ・ワールド」という壮大な宇宙に繋がっていくことを確認することになったのです。

平林 恵 | 本館学芸員



リサ・ライオンとのコラボレーションは、絵画、ポスター、写真、版画、映像作品など、多様なメディアに展開。

EVENT REPORT

01

イブニング・ギャラリーツアー

5月27日(土)18:00-18:45 | 当館オープンスタジオ(1F)、展示室



たくさんの参加者でいっぱい展示室



夜のぼんだかふえでは、つつい長居してしまいます

清々しい晴れの日の夕暮れ、40名を超す多くの方々に参加いただき、展覧会担当学芸員によるツアーが始まりました。旅を切り口に1960年代から近作までを紹介する本展のエッセンスを紹介しつつ、本展のための調査で見つけた資料のこと、各作品の背景にある旅の動機やエピソード、その作品制作の秘密など、作品を観ながらたくさんのお話が展開します。熱心にメモを取り、耳と目を集中させて作品に向かう参加者の姿が印象的でした。

鑑賞後に色々な感想を語り合うのも展覧会を味わう醍醐味のひとつ。45分間のツアー終了後は、イベントに合わせて特別に20時まで営業している「ぼんだかふえ」でゆっくりしていただこうと、参加者限定のデザート券を配布しました。担当学芸員によるトークは次回展以降も企画していますので、今後もぜひお楽しみに！

多胡真佐子 | 本館学芸員補助

水道筋温泉郷ツアー

2017年3月4日(土)13:00-15:00 | 水道筋商店街界隈、当館オープンスタジオ(1F)
講師: 慈憲一(naddist)



昭和13年創業の灘温泉。水道筋界隈で数少ない現役の銭湯です

当館の最寄駅・阪急王子公園駅の東側には、500余りの店舗が軒を連ねる水道筋商店街があります。80年以上の歴史を持ち、今も人通りの絶えないこの商店街の界隈には、かつて数十軒もの銭湯があり、地元住民に愛されてきました。「ようこそ! 横尾温泉郷」展(2016年12月17日~2017年3月26日)にあわせて開催したこのツアーでは、こうした水道筋の銭湯文化の面影を、灘区を愛するnaddist(ナディスト)の慈憲一さんの案内で迎えました。参加者はマップと風呂桶を手に王子公園駅をスタート。商店街を進み、かつての銭湯跡を巡ります。水道筋の銭湯には法則があり、それは銭湯の近くに必ず床屋と居酒屋があること。“和みの3点セット”と呼ばれるこの組合せは、現役の銭湯「灘温泉」の周辺に今も見ることができます。すでに多くの銭湯が駐車場やマンションなどに姿を変えてしまいましたが、昔の芝居小屋近くで営業していた「白井温泉」や、高校野球の宿舎だった旅館に隣接していた「水道筋温泉」など、各銭湯にまつわる様々なエピソードからは、銭湯が人々の娯楽や生活文化と深く結びついてきたことが伺えます。道中では、慈さんおすすめの名店や日本で唯一商店街のアーケードの下を走る「坂バス」なども紹介。盛り沢山の内容で、水道筋の歴史や文化、そして今現在の魅力を存分に感じることができました。

林 優 | 本館学芸員



風呂桶を片手に銭湯跡を見学



人情味ゆたかな市場

Ayuو スペシャルライブ&トーク
一子どもの目から見たサイケデリック文化

2017年6月3日(土)14:00-17:00 | 当館オープンスタジオ(1F)

出演: Ayu(Vocals, Guitar, Ukulele, Voice and Movements)、沢田穰治(Bass, Guitar, etc.)、田沢麻紀(朗読)



Ayuさん(左)と沢田穰治さん(右)

1967年、サイケデリック文化全盛のニューヨークで、横尾さんが夢中になったもののひとつが音楽です。滞在中ロック三昧の日々を過ごしていた横尾さんと、当時小学生だったAyuさんは一緒にコンサートに出かけていました。そんな体験談と、そこから音楽の道を歩むことになったAyuさんの現在の活動が緩やかにリンクする「ライブ&トーク」は、「ヨコオ・ワールド・ツアー」展のために構成されたスペシャル・プログラム。沢田穰治さんとの共演も大きな見どころです。オリジナルの楽曲や、展示中のレコードのアレンジ曲が、時にはギターやウクレレで、時には声や動きで演劇的に表現されます。そして、1968年に横尾さんが書いたテキスト「ニューヨークスケッチ」の朗読とAyuさんのトークが当時のニューヨークへの想像力をかき立てます。ミュージシャンとして実験的なライブ活動を行っているAyuさんのルーツと、横尾さんのエネルギーの秘密を覗き見ることができた貴重な時間でした。



横尾さんがジャケットをデザインしたAyuさんのアルバム『EARTH GUITAR~千の春の物語』の曲も演奏されました

平林 恵 | 本館学芸員

Editors' Choice 01 MUSEUM SHOP

「ヨコオ・ワールド・ツアー」開催記念! HYSTERIC GLAMOURとのコラボTシャツ



ニューヨーク近代美術館「ワード・アンド・イメージ」展
バナーと横尾さん

「ヨコオ・ワールド・ツアー」開催にあわせて、横尾さんと、人気ファッションブランドHYSTERIC GLAMOUR(ヒステリックグラマー)のコラボTシャツが制作されました! 1968年にニューヨーク近代美術館で開催された「ワード・アンド・イメージ」展のために横尾さんがデザインしたポスターをアレンジした白バージョンと、2006年のコラージュ作品をベースにした黒バージョンの2種類。レディースはTシャツワンピースのデザインです。2種共に背面には横尾さんのワールド・ツアーの軌跡が配されています。展覧会終了後も引き続き販売していますので、ぜひ当館ミュージアムショップにてご覧ください。

多胡真佐子 | 本館学芸員補助



「YOKOO TADANORI "Y.T.WORLD TOUR"」#1(手前)/#2(奥)

Editors' Choice 02 アーカイブルーム

展覧会「ヨコオ・ワールド・ツアー」出品のアロハシャツは、アーカイブ資料です。ミュージアムショップでも販売している横尾さんの作品をモチーフとした洋服や鞆、雑貨等は、商品であるとともに当館アーカイブの収集対象でもあります。しかし、これらの資料は脆弱な素材である布が使用されていたり、金属やプラスチックなど性質の異なる素材が複合的に使われていたり、長期的保存を想定されずにつくられていることがほとんどです。

流通し多くの人に好まれたものほど日常的な使用により劣化が進んでいたり、失われていたりすることも少なくありません。保存に独特の困難さが伴う分野ではありますが、網羅的な収集を目指し、少しでもよい状態で後世に残していけるよう努めています。



長期保存に際し、資料に付けられている金属製のピンやタグを分離します。タグも資料情報が記されているため保存します



(右)《YOKOO MAP C/S ALOHA/41/XL(ボヘミアンズ)》
作家蔵。製造元から横尾さんの元に納められた商品サンプルを、
アーカイブ資料として保管しています

奥野雅子 | 本館学芸員補助

Topics 東京と青森での横尾さんの展覧会をレポート!

01 「横尾忠則 HANGA JUNGLE」

町田市立国際版画美術館(東京) | 2017年4月22日(土)~6月18日(日)

9月に横尾忠則現代美術館への巡回が予定されている「横尾忠則 HANGA JUNGLE」展。4月、立上げ会場である町田市立国際版画美術館の開会式に出席してきました。映画監督の山田洋二さんや、元宝塚歌劇団宙組トップスターの大和悠河さんら横尾さんと親しいゲストも駆けつけ、なんとも華やかな雰囲気です。横尾さんの版画作品の全貌がみられる貴重な機会ということで、展示室は身動きがとれないほどの盛況でした。

「版画」というと、「油絵」などに比べて、どちらかというと「地味」な印象を持たれている方もいるかもしれませんが、この展覧会はぜんぜん違います。横尾さんならではの強烈な色彩と造形感覚がてんこ盛りで、まさにジャングルのように密度の高い、たいへん見応えのある内容でした。



開会式に駆けつけた山田洋次さん(映画監督)と大和悠河さん(元宝塚宙組トップスター)

山本淳夫 | 本館学芸課長

02 「横尾忠則 十和田ロマン展 POP IT ALL」

十和田市現代美術館(青森) | 2017年6月17日(土)~9月24日(日)



公開制作で愛猫「たま」を描く横尾さん

十和田市現代美術館でも横尾さんの個展が始まりました。奥入瀬渓流のイメージに繋がるような「滝」のシリーズ、青森や十和田に関連する作品、横尾さんのアトリエから直送された新作など、様々な引き出しを覗くかのような展示になっています。

展覧会初日には横尾さんが会場内で制作する姿を来場者が息を詰めて見守っていました。描かれたのは2014年5月に他界した愛猫「たま」。会場には、進行形のシリーズ《たま、帰っておいで》のタイトルで、39点もの「たま」の思い出が展示されています。

平林 恵 | 本館学芸員

03 映画や書籍… 横尾さんのその他の活動

山田洋次監督の映画「家族はつらいよ2」(全国公開中)のタイトルバックを制作。「家族はつらいよ」に続く、2度目のタイトルバック制作が話題となりました。そのほか、「横尾忠則 HANGA JUNGLE」にあわせて刊行され、横尾さんの全版画約260点が収録された作品集『横尾忠則全版画 HANGA JUNGLE』(国書刊行会、2017年4月24日刊)。さらに、朝日新聞に掲載された8年間133冊分の書評が一冊になった、横尾さん初の書評集『本を読むのが苦手な僕はこんなふう
に本を読んできた』(光文社、2017年7月19日刊)など、展覧会のみならず、映画や書籍でも精力的な活動が続いています。



映画「家族はつらいよ2」ポスター(デザイン:横尾忠則)



『本を読むのが苦手な僕はこんなふう
に本を読んできた』表紙

今後の活動予定 横尾さん公式Twitter等からの最新情報!

[展覧会] ポンピドゥー・センター・メス(フランス)での二つの展覧会への出品

「Japan-ness. Architecture et urbanisme au Japon depuis 1945」(2017年9月9日~2018年1月8日)

1945年以降の日本の建築と都市計画に焦点を当てた展覧会

「Japanorama. Nouveau regard sur la création contemporaine」(2017年10月20日~2018年3月5日)

1970年代以降の日本の美術作家を紹介する展覧会

[ポスターデザイン]

イギリスのロックバンド「デュラン・デュラン」の9年ぶり来日公演記念ポスターのデザイン

詳細情報は改めて当館公式Twitter、Facebookなどでお知らせします。どうぞお楽しみに。

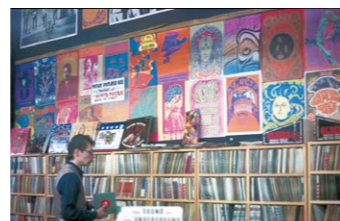


横尾さんの元に届いた「Japanorama」展の招待状(提供:ヨコオズサーカス)

Column アトリエの資料

「ヨコオ・ワールド・ツアー」の準備は、文献資料をもとにした横尾さんの海外旅行年表の作成から始まりました。そして「アトリエに海外旅行の写真がたくさんある」という情報が届いたのが今年の1月。それから3月まで、のべ7日間、横尾さんのアトリエに通い海外旅行の資料を調査することになりました。大小あわせてアルバム約50冊分の紙焼写真を年表と突き合わせてみると、年表上では1行に集約されてしまう「1984年 メキシコ」、「2000年 エジプト」といった記録がリアリティをもち、身近に感じられます。1枚のスナップ写真が作品の重要な鍵になっていることに気づいたり、横尾さんから旅行のエピソードを聞くことができたおかげで、展示プランも少しずつ変化していきました。なかでも特筆すべきは、1964年にヨーロッパで撮影された35ミリのスライドフィルム。約500点が1月末に新たに見つかったのです。褪色が進んでいたフィルムを未来に活かすためにも、データ化して展示に加えることにしました。

調査のもうひとつの軸は横尾さんのレコードコレクション。横尾さんを熱狂させた1967年頃のニューヨークの空気



1月末に見えられたフィルムより、1967年頃のニューヨークのレコード店



レコードコレクションの展示風景

を演出するため、横尾さんが当時聴いていたレコードを見せてほしいとお願いしたところ、段ボール20箱分、約2000枚ものLPレコードがアトリエに運び込まれていました。ロックやクラシック、民族音楽、演歌など、ジャンルも時代も様々。なるほど横尾作品の豊穡な世界観をつくり出している素材は、視覚的な要素だけではないのだと得心しつつも、途方に暮れました。そこで、当時ニューヨークで横尾さんと音楽体験を共有したミュージシャン・Ayuoさんの協力を得て、1960年代から70年代に横尾さんが影響を受けたロックやインド音楽、その流れを汲む80年代以降のレコード約300枚に絞り込み、最終的に横尾さんに72枚を選んでいただき、展示に加えました。

そして、いよいよ展覧会も目前に迫った4月のこと。「展覧会場にスーツケースを置きたい」というリクエストに快く答えてくれた横尾さん。ご自宅に伺ってみると、大小10個の旅行かばんが用意されていたのです。思えば、写真もレコードも想定のパリウム10倍はありました。「ヨコオ・ワールド」を形づくる膨大な情報の存在を改めて意識した調査でした。



卓球台のある地下のスペースは、レコードと写真で埋め尽くされ、卓球台は作業台と化しました。

平林 恵 | 本館学芸員